人類は700万年程前以来幾種類もの絶滅の後、凡そ25万年前突如裸のホモ・サピエンスが地球各地で生まれた。これが私達現代人である。南米アマゾン奥地・赤道直下・精霊の棲む森・「ヤノマミ族」一万年の歴史。

井上達明建築事務所　正会員　井上　達明

考えてもみよ。現代人が猿のように全身毛むくじゃらであったなら？ 又イルカのように全身どこにも毛が無いすっぽんぽんであったなら？ 筆者は2006年以来毎年、我々ヒトは何者であるかについて、地球生命は地球大異変即ち全球凍結(少なくとも二度)や大陸分裂によって幾つもの種が絶滅し、絶滅した種の身体各部の遺伝子を解体し地球生命の新しい種の「必要」と「欲望」によって遺伝子の組換再構成が発生して、突如のように幾つもの新しい種が生まれたことを説明し証明してきた。人類の種が発生したのも例外ではない。猿が徐々に進化して「裸のヒト」になったのではない。今の猿の子孫が進化して「ヒト」になったりはしない。獣類・ヒト属：ホモ・サピエンスは敢えて遡れば獣類の王様 恐竜(２億３千万年前―６千５百万年前)であり、その中の二足歩行の肉食恐竜又は翼竜(白亜紀１億４千４百万年前―６千５百万年前)は骨格からしてヒトの原型だと筆者は考えている。チャールズ・ダーウィン(1805-1882)の「適者生存」では地球生命の「新しい種の出現」は一切説明出来ない。

元房総自然博物館館長 島 泰三は著書「はだかの起源」で、ホモ・サピエンスの遺伝的研究によりホモ・サピエンスの祖先は20万年前のアフリカの一人の母親に辿り着くという1987年の Cann et al の「ミトコンドリア・イヴ」仮説を引用している。この1980年代の遺伝学的研究の結論は十数年後遺跡と化石の研究によって実証された。かくてホモ・サピエンスの出現年代を25万年前辺りに置くと後期旧石器文化要素の出現年代とも揃うことになる。そして裸の哺乳類と人間の裸化の諸仮説の検討から、人間クラスの大きさの陸上哺乳類が裸で生き残る為には住む為の家と暖房の為の火そして衣服が必要となる。ホモ・サピエンスが出現した頃、ヨーロッパの殆どと中近東迄先輩格のネアンデルタール人が住んでいた。彼等は毛皮を着、火も使い、石器を取り付けた槍等で狩りもしたが、洞窟に住み密閉出来る家は持たなかった。ネアンデルタール人は脳容積がホモ・サピエンスより大きく体の作りもがっしりしていたが、折柄のリス氷河期(19万年前―13万年前)や過去の最終氷河期(２万４千年前―１万２千年前)の極寒に耐えられず(ヨーロッパでは猿も絶滅)、鋭い石器を取り付けた槍で大型動物を狩り、先住者を攻撃する狡知と意志力を持ち、密閉出来る住宅から出撃するホモ・サピエンスと一万年程共存した後絶滅した。かくて裸のホモ・サピエンスは、羽斑蚊(マラリア糸状虫を媒介)のいるアフリカでは蚊のいない高地に住み、寒地では家を造って氷河期を凌いだのである。「裸」という不適形質を「家」で乗り切ったホモ・サピエンスは裸と並ぶ不利な形質を更に持つことになる。それは喉頭で気管と食道が交叉しているという生存に不利な構造である(咽喉の拡大)。老人では誤嚥が起きる。しかしこれのお陰で言葉を発声する事が出来るという有利な条件に特化した、即ち吸い込んだ息を細かく吐き出して吐く息に音色と高低と強弱を付けて自在に操る肺と口の周辺の筋肉とそれを支配する神経が発達した。即ち不適者の生存である。ネアンデルタール人は言葉を持たなかった。ホモ・サピエンスの特長はその脳の巨大前頭葉である。彼等は動物としては初めて自らの「死」と「死後への恐怖」を知った。死者の埋葬がそれを示している。次いで「将来への不安」にも嘖(さいな)まれるようになる。将来への不安という有り得ない幻影に怯え、想像上の敵を作り出して憎悪を強めたと島は記す。筆者は大戦争もこの流れに利害が絡んで幾度も起こったと考える。テロリズムもホモ・サピエンスの本質である。地球の歴史の中で生物の種としての寿命は10万年とも100万年とも言われる。私達の地球はこの後１万５千年で氷河期となると言われる。今日文明を享受しているホモ・サピエンスは果たして次の氷河期を乗り越えることが出来るだろうか？

平成21年、新型インフルエンザウィルスのパンデミ

キーワード　家・氷河期，大きい前頭葉，言葉，ヤノマミ，森と蟻，精霊と天

連絡先　〒555-0011　大阪府大阪市西淀川区竹島３-７-４　井上達明建築事務所　ＴＥＬ：06-6478-1028

ックで世界中が大騒ぎになった。当時外国からの航空機の客の検疫等がニュースを賑わせた。筆者はインフルエンザウィルスは飛行機に搭乗しなくても世界各地で発生することが出来ると考えている。そして同様にホモ・サピエンスも世界各地「多地域で生まれた」と筆者は考える。パスツール(Louis Pasteur, 1822-1895)の「細菌の自然発生説の否定」は瓶詰・缶詰の中での話であって、地球は瓶詰でも缶詰でもない。「地球生命」は学者達の考えるより遥かに凄まじく意味深長なのである。平成22年3月25日付け産経新聞によれば、約４万年前中央アジアに「未知の古人類」が生息していたとする研究成果をドイツ・米国・ロシア等の国際研究チームが同日付け英科学雑誌「ネイチャー」に発表した。シベリア南部アルタイ山脈の「デニソワ洞穴」で見付かった化石からミトコンドリアの DNA を解読し､進化系統を分析した。「ミトコンドリア･イヴ仮説」は既に崩壊していると筆者は考える。

平成21年４月21日 NHKTV総合の「NHKスペシャル」で放映された「ヤノマミ・奥アマゾンに生きる奇跡の部族▽150日間カメラが見つめた原初の生活▽森に神秘の精霊6831」を見た。南米ブラジル・アマゾン・赤道直下、不思議な雲、円い家、吹き曝しの屋根だけの平面が外径60m程のドーナツ型の上家が唯一の建物シャボノである。150人が一つ屋根の下に暮らし、家族毎に仕切りがある。片言のポルトガル語しか通じない。通訳が訳してくれたのは極く僅かな言葉だけであった。一つ屋根の皆は同じ物を食べる。大人達が帰って来る。大猟で猪を解体し公平に分ける。自給自足で１万年変わらないという。ここはブラジルの保護区となっていて宣教師が来たこともあるそうだが、今の所訪れる者は殆ど無い。囲炉裏の向かいで天の声と会話するシャーマンは幻覚剤の力を借り、様々な動物の霊を体内に呼び込み、患者を治療する場合は自分の体内に呼び込んだ動物の霊を患者に送り込み病を治す。村には18人のシャーマンがいて、イブラシンは偉大なシャーマンである。間もなく自分は死ぬと言う。人間は死ねば天界に昇り、精霊となり虫となって消える。精霊もやがて死ぬ。ヤノマミの人々はその祖先が動物に生まれ変わったと考えている。少年は動物の狩りが成功しない内は男として認められない。ヤノマミは猿・獏・鰐やアルマジロを燻製にして保存し食用とする。万物は山の精霊から生まれると考える。死者の伝言を運ぶ蝶もおり、蛇が人を死の世界へ導かぬよう蛇を殺す。男は蟻となり死体に群がり死体を食べる。男と女の生殖器は偉大なものとされ、男の生殖器は「モシ」女のそれは「ナナバタ」と言う。シャボノの入口にナナバタの形を持つ巨木がある。ヤノマミの女は必ず森で出産する。来てもよいとの合図があり、行ってみると産み落とされたばかりの嬰児が地面に転がっているのに母親は抱き上げようともしない。嬰児は未だ人間ではなく精霊なのだ。赤ん坊は泣き立てる。随分時が経ってから母親はバナナの葉を持って来て胎盤を包み、すぐに子を抱き上げた。これで嬰児は人間として認められたのである。男達は女の出産に一切立ち会わない。母親は生涯子供と一緒に暮らす。子供は皆で助け合って育てる。同居して90日目、一つの家族が自分達の家を建てた。このシャボノの人口が倍近くになっていた。一つのニマ(個室？)で娘がいなくなった。聞けば娘が妊娠したと言う。14歳位で未婚のまま妊娠することも珍しくないそうだ。同居して120日、少女が家族の元へ戻ったが、何故戻って来たか両親は何も聞かない。少女に臨月が近付いていた。生まれた子を育てるか天に帰すか彼女一人で決めなくてはならない。このシャボノでは一年に120人生まれ､その半数が精霊のまま天に帰され天で再会することを待つのだ。少女の出産を手伝う為女達が森に入る。陣痛４～５時間の後、少女は出産しそして決断して我が子を精霊のまま天へ送った。その夜、出産による出血が続いた。少女は土の上に座り夜を過ごし、夜明け前少女の脇から幽かな声がする。少女の隣で少女の父親が呟く―「森は大きい。歩けない程大きい…」少女の子は白蟻に食べられ天に昇り､子供を食べた蟻は焼かれて土に還る。「ヤノマミ」それは人間という意味だ。素裸で森に向かうヤノマミのお父さんの姿は正に私達日本人と同じ肌の色であり、ネイティヴアメリカンとも違っていた。同じ中南米のアステカ人やインカ人はどんな肌、どんな姿をしていたのか？ ヤノマミは土地を私有せず､夜灯りもなく、鉄砲も持たず、エイズに感染せず、人口も増やさず、精霊を信じ崇高に生きている。我々はお金や政治に右往左往している。我々は何をして来たのか？これから何をしたら良いのか？ 冒頭の筆者の疑問に戻るが、筆者はもし我々ホモ・サピエンスが裸でなかったら、体熱の放散が今のように上手くいかず、清潔な手術や精密な工業が不可能となり、裸の美もなかったであろうと考える。ヤノマミの自称一万年は十万年のことではないか？